

志賀町末吉館畑遺跡の発掘調査

加藤 克郎

はじめに

末吉館畑遺跡は、羽咋郡志賀町末吉地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。当該地区内において石川県農林水産部農地整備課が県営ほ場整備事業（末吉地区）を行うことになった。そこで石川県教育委員会と石川県羽咋農林総合事務所との間で協議が行われ、石川県教育委員会文化財課が平成12（2000）年10月・11月に約14haを対象に試掘調査を実施し、事業区域内に約4,300㎡広がることが判明した。これを受けて石川県教育委員会は、羽咋農林総合事務所と協議の上、工事着手前に発掘調査を実施することになった。この発掘調査は石川県教育委員会から財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、調査に係る費用は石川県農林水産部農地整備課と、石川県教育委員会が文化庁の補助を受けて負担した。

発掘調査は財団法人石川県埋蔵文化財センター調査部調査第2課主事宮川勝次と同課主事加藤克郎が担当し、平成13（2001）年5月8日から5月29日にかけて実施した。調査面積は180㎡である。調査の結果、A区B区ともに遺構・遺物は希薄であった。調査期間中は天候にも恵まれ現地調査は予定通り終了した。

さて、本報告における挿図中の方位は磁北で、水平基準は海拔高である。また調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

なお本報告をもって発掘調査報告書に代えるものとする。

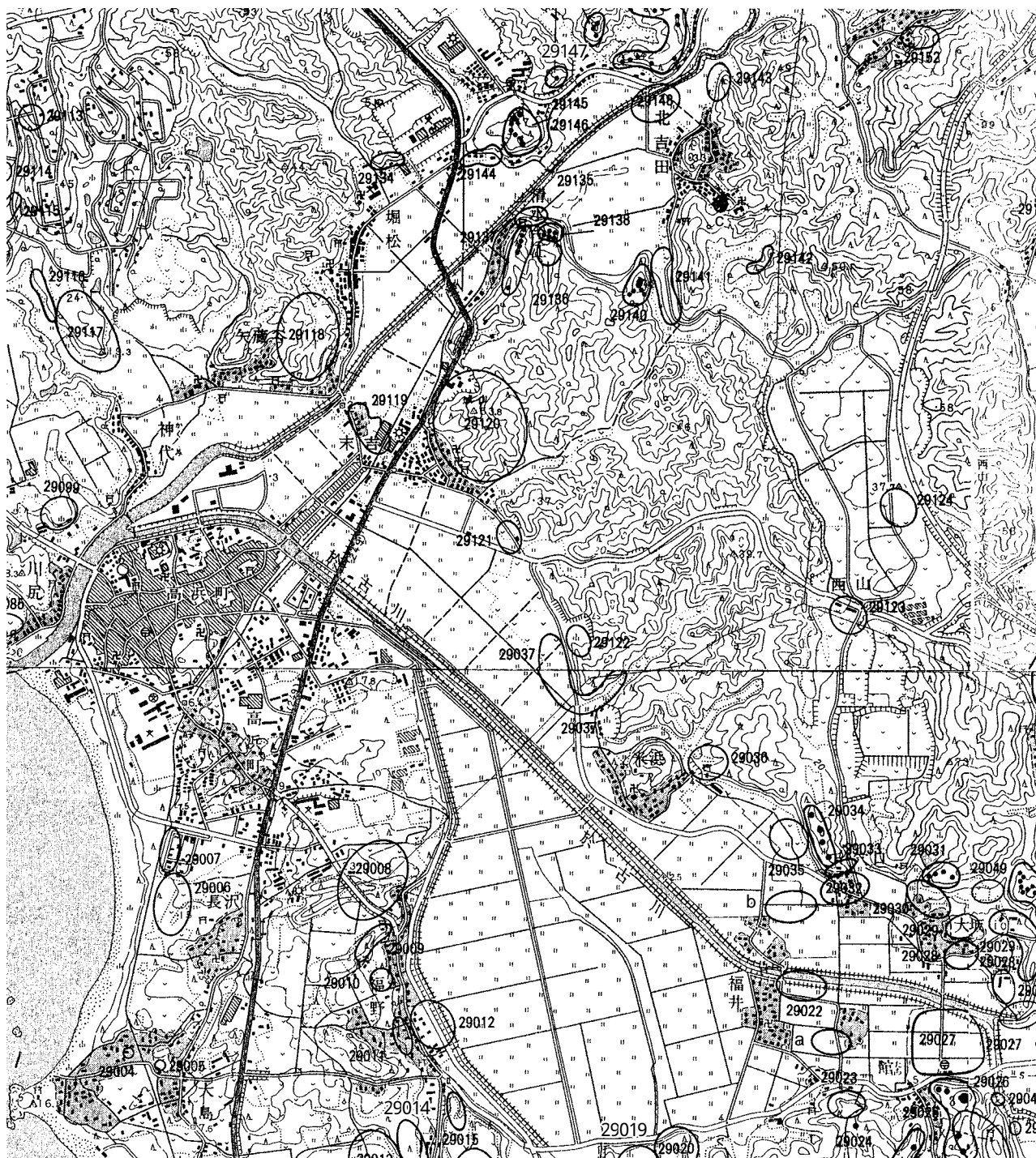
遺跡の位置と環境

遺跡の位置 遺跡の所在する羽咋郡志賀町は、日本海に突出した能登半島の中央西部に位置する、東西約10km、南北約20kmの総面積約122km²の町である。町域の西部は日本海に面し、町域の東部から南部にかけては眉丈山系に連なる低丘陵地帯である。これら丘陵地帯に囲まれた平野部は、町の北東の富来町奥刈越峠を源とする米町川と、南東の眉丈山系を源とする於古川により形成され、この2河川が神代で合流して神代川となり、町のほぼ中央部で日本海に注ぐ。海岸線は神代川河口を境として様相は一変し、北側は輝石安山岩質の集塊岩の岩石海岸で、対して南側は海岸砂丘地である。

さて於古川の貫流する低地一体は旧福野潟が広がっていたところで、かつては東西約2km、南北約4km、周囲は10km以上の広がりを持っていたと推定されており、この旧福野潟の推定汀線に面して福野、宿女、福井、上棚、矢駄、穴口、米浜、末吉の各集落が点在する。旧福野潟は、縄文時代早期末から前期のいわゆる縄文海進時に形成された入江に由来し、その入江が砂丘の形成により次第に湾口が塞がれ、以後於古川や米町川の水流土砂の堆積作用と、近世以来の干拓により次第に陸化したものである。



第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

- | | | |
|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| 29004大島氏館跡 (平安) | 29005大島たたら遺跡 (不詳) | 29006長沢中世遺跡 (中世) |
| 29007長沢ハマナス遺跡 (中世) | 29008大念寺跡 (中世) | 29009福野横穴群 (古墳) |
| 29010福野上野遺跡 (不詳) | 29011福野高野坂遺跡 (縄文～古墳) | 29012福野前川遺跡 (弥生～中世) |
| 29013大島神主山遺跡 (古墳～平安) | 29014長沢堂ヶ谷内遺跡 (縄文) | 29015福野経塚中世墳墓 (中世) |
| 29019福井まんだら B 遺跡 (中世) | 29020福井まんだら A 遺跡 (縄文) | 29022館泉田遺跡 (不詳) |
| 29023館遺跡 (不詳) | 29024おお干場古墳 (古墳) | 29026二所宮宮山古墳群 (古墳) |

周辺の遺跡 本遺跡の周辺では、旧福野潟低湿地帯を取り囲む丘陵や微高地に、比較的多くの遺跡が展開している。縄文時代では、前期の川尻ナベタカ遺跡、中期には堀松・神代・穴口の3貝塚が存在する。中期前葉～後・晩期の太坂遺跡、中期中葉～後葉の長沢堂ヶ谷遺跡、晩期の米浜遺跡がある。

弥生時代については北吉田米町川遺跡から中期初頭の柴山出村式土器が出土している。これに後続する中期小松式土器は福野前川遺跡、後期の遺跡として太坂坊の下遺跡・穴口遺跡の他、高地性集落として著名な北吉田フルワ遺跡がある。

古墳時代では、米浜はげの下遺跡などの集落遺跡の他、前・中期の太坂城ヶ墓古墳群、中期の堀松古墳群・清水古墳群、後期の北吉田古墳群などが知られている。

古代律令制下では本遺跡周辺は能登国羽咋郡に属し、『和名類聚抄』に記される都知郷の範疇であったと考えられている。周辺の古代遺跡では、米浜遺跡で6～9世紀の製塩土器が出土しており、また太坂舟の町遺跡にて丸木舟・櫓や浮きが出土しており注目される。これらのことからこの時期には旧福野潟は海水の流入する潟湖で、製塩や漁撈を行っていたことがうかがわれる。

中世では長沢中世遺跡、大念寺跡、福野経塚中世墳墓、福井マンダラ寺B遺跡、北吉田埋蔵銭遺跡の他、本遺跡の東約400mの地点に在地領主手筒氏・河野氏の山城との伝承がある末吉城跡がある。また旧福野潟周辺は石動山周辺と並んで県内有数の板碑集中地区で、時期は鎌倉時代後期から室町時代中期にわたる。特に福井所在の正応4（1291）年銘を有する大日板碑は、県内で2番目に古い紀年銘を有する板碑である。また本遺跡の所在する末吉地区には室町期の五輪塔所刻板碑がある。当地域は中世の信仰形態を考察する上でも重要な地域である。

調査結果

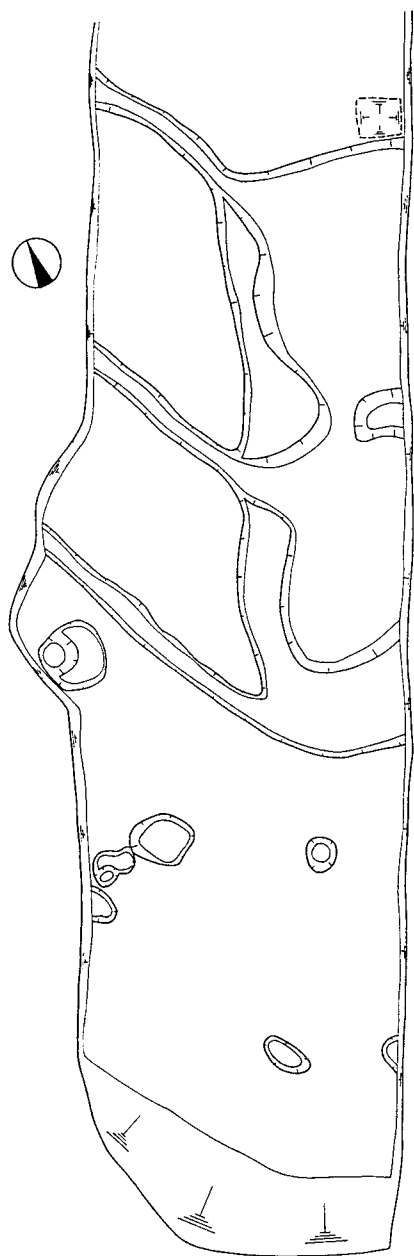
1 遺構（第4図、写真4・6）

今回の調査では、北東側の幅2m、長さ30m、現況が水田である調査区をA区とし、またその南側の幅1m、長さ120m、現況が農道である調査区をB区とした。

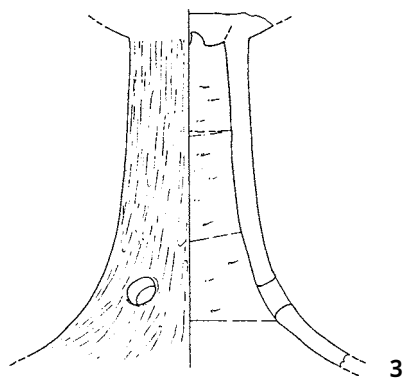
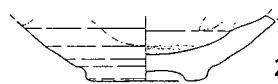
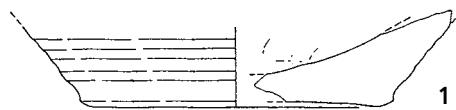
A区 A区では現況水田面より約20cm下（海拔1.4m）で褐灰色粗砂の遺構面が確認された。そして田面から約1.8m下まで掘削すると暗青灰色粘土の湧水層に達した。A区の北側では遺構は検出されなかったが、南側では規模が2.4m×0.5m、深さ2～13cmの浅い落ち込みと、その落ち込みの西側に接する、幅20cm、深さ4cmの3条の溝が検出され、他にピットを7つ検出している（内2つは現代の架穴）。これら遺構の周辺からは須恵器坏小片1点と古瀬戸の天目茶碗小片1点が出土しているだけなので、これら遺構の年代を特定するには至っていない。またその性格についても不明である。ちなみに今回A区とした水田の通称はタチバタケ（館畑）ではなくサンガデン（地元では三月田と宛字している）である。

B区 今回B区とした調査区の西側に広がる80m×70mの竹藪に囲まれた区画を地元では館跡とする伝承があり、館跡伝承地及びその東側一帯をタチバタケ（館畑）と通称している。B区南端の東側約10m、現在石川サンケン株式会社本社社屋が建っている地点で、昭和60（1985）年に志賀町教育委員会により発掘調査が行われている。その際には表土から約1m下で平安時代の遺構面が確認され、溝、ピットを検出している（未報告）。遺物としては須恵器・土師器の他、青銅鏡片1点が出土している。

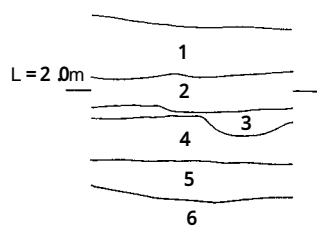
しかし志賀町教委調査区に隣接するB区南端では遺構面は確認できなかった。現地表面下約0.3m（海拔2.2m）で、昭和40年代の耕地整理前に利用されていた用水のU字溝の上端を検出、また地表面下約1m（海拔1.5m）でU字溝の底面を検出、そして地表面下約1.3m（海拔1.2m）で耕地整理



第4図 A区南側遺構平面図 (S = 1 / 60)



第5図 出土土器実測図 (S = 1 / 3)



- 1 明黄褐色砂 (農道造成時の盛土)
- 2 暗茶褐色砂 (旧表土)
- 3 暗茶褐色砂 (淡茶白灰砂が多量に混入)
- 4 淡茶白灰砂
- 5 暗赤褐色砂 (鉄分が多い)
- 6 暗青灰色砂 (粘性あり / A区北端では海拔 0.2m 付近で検出)



第6図 B区土層断面図 (S = 1 / 60)

の際埋設されたパイプラインの上端が確認された。このB区に埋設されているパイプラインは、調査当時供用中であったため破損することはできなかった。そのためB区全体にわたって旧用水のU字溝上端までは重機により表土を除去することはできたが、U字溝より下に関しては、重機により掘削するとパイプラインを破損するおそれがあったため、複数箇所人力掘削によりパイプラインの埋設深度を確認するとどめた。以上のようにB区ではパイプライン埋設による攪乱のため遺構面を検出することはできなかったが、中・近世の遺物数点を採集している。

2 遺物（第5図、写真8）

遺物としてはB区において珠洲焼片、唐津焼片各1点を採取している。1はB区層序確認トレンチ掘削時に出土した珠洲焼甕の底部である。素地の色調は灰黄色を呈しており、内面には指による縦方向のナデが見られる。14～15世紀の所産であろう。2は1と同じくB区層序確認トレンチ掘削時に出土した唐津焼皿である。素地の色調はにぶい橙色を呈し、内面から外面上部にかけて灰釉がかかっている（高台は無釉）。内面には重ね焼きの砂目跡が巡っている。17世紀前葉のものであろう。3は今回の発掘調査で出土したものではなく、平成9（1997）年2月の米町川河川工事立会いに際して採取された遺物である。その出土地点は、今回の調査区の南西約100mにかつて存在した旧淵端橋の南詰である（現在の淵端橋は河川改修工事の際、約100m下流に新たに架けられたものである）。これは弥生土器高杯脚部で、胎土には粗砂が多く含み、色調は灰白色に近い浅黄橙色である。調整としては、外面はやや摩耗しているが縦方向のミガキが確認でき、内面はナデと螺旋状のケズリが見られる。時期は弥生時代後期後半（法仏式）と見られる。

まとめ

今回の調査で出土した遺物は小破片かつ少量であるため、本遺跡の年代を考えるには十分ではないが、隣接する昭和60年の志賀町教委調査区の成果をあわせて勘案すると、弥生時代、古代～中・近世に至る遺跡があったものと推定される。さてB区の西側には館跡と伝承される区域があることは先述したが、調査当時B区南西側には幅約1m、高さ約0.5mの土塁状の盛上がりがあり、その上に竹藪が繁茂している状況であった。この盛上がりが伝承のように館に伴うものなのか、それともB区にかつてあった用水浚渫時の排土を盛上げた結果であるものなのかについては、盛土が民地内であったため確認調査をすることができなかった。そのため館跡伝承地については検討課題として残ることになった。今後の調査に期待したい。

参考文献

- 『能登志徴』 石川県図書館協会 1937
- 『石川県羽咋郡旧福野瀧周辺総合調査報告書』 石川考古学研究会 1955
- 『志賀町史』資料編第1巻 志賀町役場 1974
- 『志賀町史』沿革編第5巻 志賀町役場 1975
- 『石川県城館跡分布調査報告書』 石川考古学研究会 1988



1

2

3

- 1 末吉城跡遠景（北東から）
- 2 調査区遠景（北から、竹藪が館伝承地）
- 3 A区遺構掘削作業風景



4 A区完掘状況（南から）



5 6
7

- 5 B区作業風景
6 B区完掘状況（北から）
7 B区土層断面（第6図に対応）



1



2



3

8 出土遺物（S = 1 / 2）